小峰城よもやま話

第二十話 三之丸と三郭四園

三之丸は、本丸と二之丸を東から南にかけて囲むように配置され、城の敷地の半分以上を占めていました。

現在は、JR東北本線が横断し、白河駅が置かれるほか、公共施設や住宅が立ち並んでいます。かつてこの辺りが城内であったことを想像するのは難しいのではないでしょうか。

松平定信が藩主の時代、三之丸の一角には定信の屋敷があり、敷地内には御殿と「三郭四園」と呼ばれる庭園がありました。その広さは、1万4千坪（約4万6千㎡）にも及ぶ広大なものでした。

三郭四園は、当時の様子を伝える絵画資料によれば、大きな池の周囲に散策路を巡らせた池泉回遊式の庭園で、さまざまな植物を植え、滝や噴水なども配置された華やかなものであったことがうかがえます。

なお、過去の発掘調査では、庭園の池の一部が良好な状態で残っていることが確認されました。

現在、小峰城歴史館では、三郭四園の様子をジオラマで再現しています。これにより、かつて定信が築いた庭園をイメージしていただけるのではないでしょうか。

▲三郭四園を描いた絵（白川城三郭御園北面之図（部分））
定信の家臣・岡本茲葉の絵を明治17年に模写したもの
（国立国会図書館デジタルコレクションより）

▲上空から見た小峰城三之丸跡周辺

問 文化財課 ☎㉗2310

渋沢栄一×松平定信 南湖を彩る系譜

第十一回 南湖神社創建（その二）

大正11年（1922）に南湖神社の社殿が完成すると、同年6月12日、東京の松平定晴（定信の子孫）子爵家から白河に御神体が奉送されました。御神体には、松平子爵、徳川宗家代表、渋沢栄一、さらに奉迎に上京した表徳会関係者が随伴。一行を乗せた列車は、午後7時40分に白河駅に到着しました。

駅前には、白河町民をはじめ近隣の人々が大勢集まり、立錐の余地もないほどでした。出迎えの町民が大小数千の提灯を掲げた様子は「まさに火の海のようであった」と渋沢は驚いています。

御神体の行列は、神職・楽人、御神体、その後ろに松平子爵、渋沢、表徳会の役員などが続き、各町内の高張提灯が掉尾を飾りました。

白河駅から中町、天神町を通り、一番町から九番町を経て南湖に到着すると、湖面には数百の灯籠が浮かべられ、花火が次々と打ち上げられました。渋沢はその森厳さに「正に竜宮とはかくの如きものか」と記録しています。

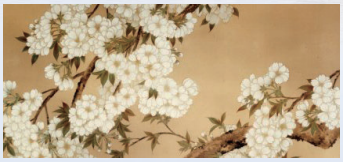
翌日午前10時から鎮座祭が挙行され、松平子爵、徳川家代理、渋沢、福島県知事その他関係者が多数列席し、荘厳裡に式は終了しました。

翌12年、南湖神社は県社に昇格。同14年、渋沢は下村観山と橋本永邦に描いてもらった『楓図』と『桜図』を神社に奉納しています。また、現在、鳥居の側に立てられている社標は、渋沢の揮毫によるものです。

南湖神社は来年、創建百周年を迎えます。

▲南湖神社鎮座祭の行列（大正11年）
（『白河市史（旧版）下巻（1971）』より）

▲下村観山『楓図』（南湖神社所蔵）



▲橋本永邦『桜図』（南湖神社所蔵）

（文・中山義秀記念文学館　館長　植村美洋）